８月２８日セミナーリフレクション

講　師：小牧市立陶小学校　末継美希先生

愛知文教大学　　永井勝彦先生

テーマ「美術・図工指導の悩み、子どもの作品の見方を語り合いませんか」

参加してよかったです（心から） すてきな子どもたちに出会えた時間でした。心がホカホカしています。 Ｓくんの映像を見ていて、思わず涙がでてきてしまいました。彼が抱える苦しみとかが伝わり、でも葛藤しながら成長している姿があった。このたった１５分の映像の中にも、他の子どもたちにも成長する姿が本当に多くみられた。クローズアップしたグループの中で、この年齢の子どもたちなら、自分の作品作りに没頭してしまうのが普通だと思います。ところが、周りを見ながら作るんですよ。先生が支えたり、子ども同士が支えたりしている。こうした学び合いの中で、Ｓくんの心の中がグルグルしているのが手に取るようにわかって感動しました。末継先生が、絶えず自己解放させながら、つながりをつくっていく姿勢がすごい。Ｓくんの振り返りに、「他の人も良かったけど、」という言葉が出たことが、彼の成長になったように感じた。 自画像のＲくん（また、お兄ちゃんたち）の居場所がありますね。自分は、ここにいていいんだという安心感が彼の身体から伝わってきました。集中力が途切れそうになっても、逃げださないのは、それがあるからなのかなと思うんです。中学校で心に苦しみをもっている子は自画像を描くと教室から飛び出す子も多いと聞きます。自分に向き合うのは苦しいことなのでしょう。でも、Ｒくんたちは、自分を見つめることを抵抗なく行い、むしろ、楽しんでいる。そこに、感動しました。 私は国語科です。レッジョエミリアのお話は文学と一緒だと思います。そして、一番一緒だと思ったのは、子どもの表現を見る（国語は読む）視点です。子どもの表現は絵や文字やその空間（行間）に子どもの生活、生き方、人となり、思いがにじみ出るものであり、私もそれを見る目をもちたいといつも思います。ありがとうございました。
宝箱の話がありましたが、このセミナーや先生方のご意見を聴いて、何よりも末継先生の実践が宝物のようだと感じるとても貴重な時間になりました。 身近なところに、こんな素晴らしい取り組みを続けている先生がいらっしゃることや、そうした授業実践を共有させていただけることに感謝し、これからも私自身の学びを少しでも深めていけたらと感じています。ありがとうございました。
粘土の授業は、個人の学びをグループにどうつなぐかという点で非常に面白い実践でした。特に「分身」としての小さな人形と宝箱（グループに一つ）は有効な手立てとなっていました。 自画像は中学校美術の定番教材だと思いますが、特別支援学級で実践していることに驚きました。はみ出すくらいに大きく描くことが重要だと思いますが、出来上がった絵は、きっと子どもたちを満足させたでしょう。 両方ともに iPad を有効に使っています。こういう使い方はいいですね。ＩＣＴなどと大げさに言わなくても、こういうことが大事だと改めて思います。

毎回、図工の授業をやるとなると、嫌だなー、こんなの教えられないなーと、思っていました。 今日のセミナーで末継先生やいろいろな先生のご意見を聞いて、これから自分の授業で作っていくためのヒントをたくさんもらえました。そして、これから何か描く、作る題材が決まったら、自分でやってみようと思いました。やっていく中で、気づくこともたくさんあるし、何より今日、楽しかったし、楽しそうだなと思えたことを、子どもたちに還元していこうと思います。本当にありがとうございました。
粘土の授業では、自分の世界をまわりと共有することで、視界を広げることができたので、人と関わることの面白さも体感できたのではないかと思います。年齢があがるにつれて、自分をさらけ出すことや表現することに抵抗を感じがちですが、「見て！」と思わせる、心がワクワクするような授業づくりに感動しました。 自画像の授業では、色画用紙にクレパスというだけでも、いろいろと広げ方ができるなと思いました。末継先生の声の掛け方や流れのつくり方は、他の作品作り（特に色彩を扱う作品）にも応用できるもので、大変勉強になりました。 当たり前ですが、上手く描く、作ることよりも、本人が楽しむことや、自分自身が納得できるものをつくらせることを、もっともっと大切にしていきたいと思いました。
すばらしく勉強することができ、学ぶことがとても大きかったです。 一つ目の授業は、学びのデザインがすばらしいと感じました。何より、グループの中の子どもをつなげること、セミナー参加者からの意見にもあったように、一人ひとりの子どもが見え、心の動きもよく感じることができました。正に、心をもつなげる取り組みになっていたと思います。これらを支えるのは、学級の「静と動」をよくわきまえた学級づくりが基盤になているとも思いました。 二つ目の自画像は、大きいサイズの用紙に、少々違っても、全体として形ができればよいと、おおらかさを感じました。しかし、細部にわたってよく見るため、タブレットを使って、それを促していることも、すばらしい。結局は、見る視点を与え、子どもの力を引き出している。そして、面白さに気づかせていることだと思いました。実にすばらしい。
本日は、大変勉強になりました。貴重な実践を紹介していただきありがとうございました。 「粘土マイタウン」を学ぶ学級の中にあふれる活気と素直な反応、温かい学級経営とたくさんの子どもたちが楽しめるような工夫や支え合いがあるからこそ、Sくんが「他の人が良かった」という仲間の良さを見つけて発言でき、自分のマイタウンに満足できたのだと思います。 特に、分身人形が鑑賞へ向かう姿勢や見方を変えた大切な手立てだと思いました。新しい見方や感じ方を仲間からも、たくさん得られただけではなく、自分自身でも新しい見方を発見できたと感じます。 「環境構成」についても、これまで焦点を当てて考えていなかったのですが、様々な材料に触れられる場を準備することで、新たな発見が拡がるのだと勉強になりました。
共同作品は、ためらってしまうところがあるが、子どもたちの「つなげる」ということへの意欲が、映像から伝わってきて、自分の授業でも取り入れたいなと思いました。街には、いろいろな形のものがあるので、子どもたちが作ったものから、形や構造の学習にもつなげられそ

うだなと思った。
　失敗してもやり直せるからこそ、試行錯誤してみようという気持ちになれるのだと改めて思った。やってみたい！と思える授業は楽しいんだと思った。

　末継先生のすばらしさを、セミナー参加のみなさんが引き出したところから、末継先生の魅力や技を一杯学びました。
　末継先生はいつも、子どもたちに魔法をかけているのですが、その魔法の一端がすっとわかりました。普段は、「しっかり見て描きなさい」しか言っていませんと話していますが、
実習する中やビデオの中の末継先生の声掛けや足場掛け一つひとつのタイミングやポイントがすばらしいと思いました。

　教育の「必要な無駄」を実感しました。あれだけの準備の必要性が、教師の力量以上の子どもの作品につながるのでしょう。子どもの誤答が想像できる教師が少なくなっている。正確な答えのみが重要になっている気がして残念に思えていたが、今日の授業は本当に子どもを活かす素晴らしさがあり、うれしかった。
　「自画像」は子どもの未知の可能性を引き出しているように思えた。すごい作品ですね。

　図工の作品は「つくる」ことに中心があると思っていました。しかし、それだけではない。「つながる」ことや「広がる」ことに向かうという図工の学びがあることを改めて気づかされたセミナーでした。つまり、作品に没頭するだけではなく、作品の「世界」や「空間」を作り出していくものだと考えさせられた時間です。

　自分にとって、理想とする場所を作るという学習は、興味深いと思いました。私は、デンマークにあったような、大木の多い森が近くにあったらと思います。そんな公園を作り、ゆっくりと小さな人形を歩かせたとき、ゆったりとした気分になるでしょう。自分の願いを作品として形にするという学習は、豊かな人生を送る上で大切な学習だと思います。
　末継先生は、次にそれらの作品をつなぐという活動をされました。つなぐことの意味はなんだろうと考えます。森の中を散策したのち、隣へと続く橋を作り、その橋を渡って次の町へ行くことは、旅行に行く時の気持ちと同じかもしれません。わくわくすることです。森の中から、海のある町、恐竜の町、ロボットの町へ、小さな人形は歩きはじめます。
　自分の知らない町をあるきますが、他人の作った作品ですから、何を表そうとしているか理解し難いときもあります。何が作られたかを一生懸命考えます。また、わからない時は、作った児童に尋ねます。作品について考えるという学習を通して、観賞になっていくのだと思います。ここで扱われた人形は、自分の分身として作品の良さを認識させるための道具として最適だと多います。
　小学校で長く指導してきましたが、作品を作ることが苦手な児童は、他の作品の良さに気づかないということに気づきました。学習指導要領によれば、小学校第 1 学年及び第 2 学年「鑑賞」として、「身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して，自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ，表したいこと，表し方などについて，　感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を広げること。」とあります。観賞の学習として、「造形的な面白さや楽しさ」に気づかせる指導することが必要ではないかと気づきました。一つの作品を全員で鑑賞して、良さを発表させたり、話し合わせたりする活動を取り入れました。しかし、鑑賞の結果を、

話す・書くという活動に限っていたため、小学校 1・2 年生にとっては、言語表記の限界がありました。末継先生のように、小さな人形を置くといった工夫により、楽しく鑑賞ができたかと思います。

鑑賞して、他の児童の作品の良さに気づいたとき、自分の作品に取り入れたいと考えるかもしれません。作品を作るという一連の造形活動は、自己実現を願い、途切れることなく永遠に続くものでもあると考えます。完成という段階はないのかもしれません。鑑賞という活動は、造形活動の途中にも取り入れるべきかと気づきました。ほとんどの児童は、隣の作品を真似して取り入れています。これも、観賞と言えます。でも、他の児童の作品の良さに気づかない場合を考えて、意識的に鑑賞の時間が必要かもしれません。

私の教員時代は、いついつまでに完成することと伝えます。そして、完成後は鑑賞をしますという学習の流れをもっていました。観賞後には、壊れないうちにすぐに家庭に作品を持って帰らせていました。それは、一つの作品の評価をしなければならない、鑑賞の能力を評価しなければならないという、教師の勝手な理論に基づいた行動であったと思います。児童の自己実現の場所であるという気持ちを大事にして、学習を行っていたらと反省しています。